

土木與昭監督の長編記録映画「水俣」は、日本の記録映画の歴史のなかに不滅の足跡を残す傑作のひとつであると思つ。記録映画の使命は、なによりも、まず、真実を語ることにある。しかし、真実というものは必ずしも快いものではない。むしろ、真実はしばしば人に嫌をそそげさせる。それは、感覚的に不快感を与えることのあるからである。

### 長編記録映画「水俣」を見て

佐藤 忠男



同時には、いま旅に出るこの人の怨(うらみ)の保持者の根柢にあるものの表現でもある。患者さんたち、家族たち、遺族たちは、長期のロケーションで気心の知れたこの映画の製作スタッフの前で、その保持者、すなわち筆頭に表現していることを語る者が何気なくそばに観察するといつくりかたにはたたく力(ちから)をそそいでいる人(ひと)に、それそれの保持者を表現してもらう、といつくりかたである。

その人たちが、自然にそつこう保持者になるように人間的な触れ合いをつくりだすことが、この映画に与つては演出だったのである。患者さんたちは、ついにチッソの株主総会に一株株主として乗り込んでいって恨みの御詠歌を歌うという痛烈な表現を行なつた。この場面は涙なくしては見られないのである。(映画評論家)

映画「水俣」は、四月十七日から二十日まで、熊本市クランド劇場で上映される。同市下通一の八の十六号後ビル四階(55500)の上映実行委員会で前売り券を発売中。

## 患者の生きざま描く 日本映画史に不滅の足跡

今日、テレビの発達で、一感水俣に達した記録映画が毎日いくつでも見られるような状態になりながら、これこそ本当の記録映画だ、真実を語つた作品だ、とこのものには感服にめぐりあふたのはその理由からである。たにお珍しいものやおそろしく、きものにメクラを付けたりすればすべからぬ記録映画が出来るというわけのものではなく、そのとき、それをつくる人たちが、なにか深い決心をされているときにこそ、真実の記録映画が出来るのだと思う。「水俣」は、そういう基本的な問題をあらためて考えさせられる作品なのである。

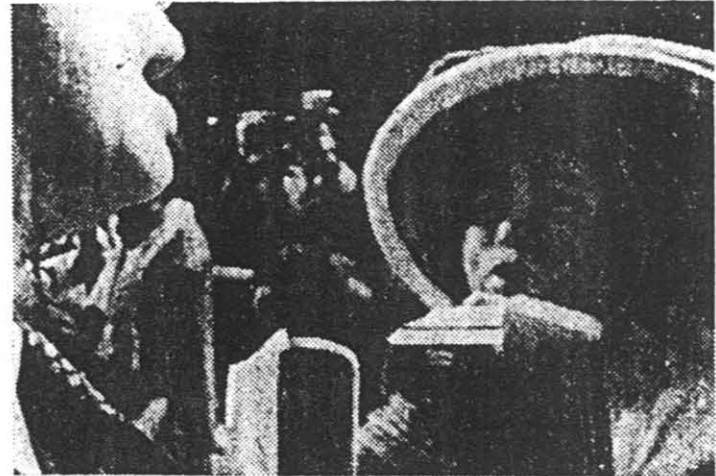
われわれは、水俣病の現状について、テレビのドキュメンタリー番組などを通じてある程度のイメージを持つてはいるつもりである。しかし、少しばかりわかつたよくな気になつていても、実はこんどわかつてなどはいなかったのだということを、この映画で教えられる。しかし、それだけのことなら、三十分のテレビ番組より二時間四十分もかかる長編のほうがくわしいのはあたりまえだ、ということになるであらう。

この映画が立派なのは、単なるなだ打ちひしがれているのではなく、無念をこらえ、苦痛をこらえながら生きていくのである。それが、とくに音聲(おとこゑ)というレコードの収録曲に聞きほれる

# 文化



カット・春口光義



大阪のチッソ株主総会で、位はいを片手に江頭社長に詰め寄る患者=映画「水俣」から